

「Society of Toxicology (SOT) 学術年会派遣報告」
— 2週間にわたるバーチャル学術年会 —
吉川理恵
Novartis Institutes for BioMedical Research

このたび、日本毒性学会より 2021 年 SOT 学術年会・教育コース「Navigating New Modalities: A Preclinical Roadmap for Developing Novel Oligonucleotide Safety Strategy」と「Advances in Single Cell Genomic Analyses for Toxicological Testing」へ参加する機会をいただきました。このような貴重な機会をくださった日本毒性学会教育委員会およびご支援いただいた先生方、事務局の皆様に深くお礼を申し上げます。

Oligonucleotide の教育コースでは核酸医薬品の概要と変遷、スクリーニングプロセス、よくみられる副作用、動物でみられる所見のヒトへの外挿性、承認申請に用いられる試験の種類や試験系の選択など、研究開発から承認に至るまでの過程における非臨床分野での関わりを広く網羅していました。特に印象に残ったお話しは、毒性のメカニズムをハイブリダイゼーションおよびシークエンスに依存性か否かという観点からアプローチしていること、小分子候補化合物で通常行われる *in vitro* スクリーニングの多くは予測が困難なため *in vivo* でのスクリーニングの比重が大きいこと、上市された核酸医薬品にみられたヒトでの副作用は血液毒性以外、動物では相関が認められにくい傾向があったこと、そして、やはりこのモダリティの候補化合物の場合でも、早い段階で背景となる情報と共に FDA に相談すれば柔軟的な対応をするということです。あらゆる面で模索が続けられているので、今後も目が離せないモダリティであると実感しました。私自身、開発の中〜後期にある核酸医薬品候補化合物に病理担当として 10 年以上関わってきました。今回、今までなじみのあった病理学的知見 (=点) を教育コース参加により新たに得られた広い視点から“線”につなげていくことができ、充実した参加となりました。

今年の学術年会はバーチャルミーティングとして 15 日間にわたって開催されました。アメリカの異なる時間帯からの参加者が無理なく参加できるよう、シンポジウムや教育コースなどの大きなセッションの大半は米国東部時間の 11 時から 14 時ごろに集中して開催されました。興味のある複数のプログラムが同時開催されている時など、リアルタイムで参加ができなかった発表が直後に録画でも見られるようになっていたのは、バーチャルミーティングならではの魅力でした。現地開催による学術年会にあるような、演者や他の参加者の方々との直接の交流、元同僚や友人との再会など、学術年会参加の大きな楽しみの一部は、今回かないませんでした。将来現地開催が再開されるときには、今までとは異なる新たな学術年会の形ができてくるのではないかと多くの可能性を感じた、思い出深い今回の SOT 学術年会参加となりました。



SOT 学術年会のバーチャルミーティング画面